

文化庁月報

No.397

2001年10月号 CONTENTS

特集

国際文化交流・ 人と組織のネットワーク

【巻頭言】
持続的な国際文化交流を目指して

村田直樹(文化庁国際課長)

【インタビュー】
新国立劇場芸術監督

栗山民也氏に聞く

【事例紹介】
イクロムを通じた文化財研究のネットワーク

三浦定俊

奈良国立博物館における国際交流

梶谷晃治

【報告】

二つの国際交流年

—英国における「Japan2001」と

日本におけるイタリヤ2001年

文化庁長官官房国際課

【インタビュー】

在日豪州大使館文化担当官

キヤサリン・フニョー氏に聞く

文化アタッシュのネットワーク

今月の表紙

英国における「Japan2001」イベント参り公園
の中の日本文化
©Cerant Lewis

新国立劇場スポットライト／45

十一月の国立劇場／46

芸術文化振興基金ニュース／47

11月号予告／編集後記／48

ACA NEWS

国民文化祭・ぐんま2001	36
文化芸術活動への寄付について	37
第43回教育文化週間	38
第48回文化財保護強調週間	38
第51回全国民俗芸能大会	38

イベント案内

京都国立博物館 特別展覧会 ヒューマン・イメージ —われわれは人間をどのように表現してきたのか?—	39
国立国際美術館 主題としての美術館 —美術館をめぐる現代美術—	40
奈良国立博物館 正倉院展	41
京都国立近代美術館 生誕100年記念 小松均展	42
東京国立博物館 名品を手軽に楽しむ —日本工芸の至宝堂オープン—	43
東京文化財研究所 第32回 東京文化財研究所芸能部公開学術講座	44

連載

●文化庁長官佐々木正峰の 文化人と語る① 平山郁夫さん(画家)	4
●Cross Road 松本零士さん(漫画家)	23
●ことばの万華鏡⑨ 恐れがあります	水谷 修・26
●文化の現場から⑦ 劇場へ —舞台芸術を身近に感じる社会をめざして—	中川俊宏・27
●まちに生きるミュージアム⑦ 求められるミュージアムマネジメント	大堀 哲・28
●キーワード事典・アートマネジメント⑦ 文化施設にとって「ニーズ」とは何か	伊藤裕夫・30
●保存修理の社会学・2① 社会との共生	32
●日本の伝統美と技を守る人々—選定保存技術保持者編⑦— 広瀬敏雄・金江宗太郎(金江宗観)さん	34

新国立劇場芸術監督 栗山民也氏に聞く



栗山民也氏は芸能座、フリーの演出家を経て、平成10年10月から新国立劇場演劇部門の芸術監督、昨年5月から芸術監督。紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、芸術選奨文部大臣新人賞などを受賞。昭和62年～63年に文化庁派遣芸術家在外研修員として英国に留学。

インタビュー・構成／文化庁国際課国際文化交流室長
町田大輔

今日は「ネットワークを生かした舞台づくり」というテーマでお話を伺いたいと思います。最初に、栗山監督はかつて文化庁の在外研修で英国に滞在されていたときに舞台づくりと人や組織

のネットワークという点について何か学ばれたことはありますか。

文化庁の在外研修は本当に良い事業だと思っています。私は一九八七年にロンドンに行きましたが、そこは民族や宗教の異

なる人たちが住んでいますので個人個人がコミュニケーションをとることに努力しなければいけない社会でした。劇団のメンバーは三〜五年の周期で入れ替わりますので、コミュニケーションと同時に個の確立が求められます。メンバーが固定化している日本の劇団と比べてネットワークをつくることの重要性が大きいと感じました。私はナショナル・シアターで研修していましたが、人間の結びつきが演劇の力だと感じました。当時の私の住まいの近くにコミュニティー・センターがあり、五〇くらい行っている活動の中に演劇もあって、インド人の先生のもとにあらゆる人々が集まっていました。演劇に限らず社会全体がネットワークを持つことによってつながるよう意識している国という印象があります。

人が交際した方がネットワークは作りますのでしょ。

異質なものがぶつかり合うことが新しい発見につながるのだと思います。留学中にパリのオデオン座という劇場にも行きましたが、ヨーロッパ劇場というもの

持続的な国際文化交流を 目指して

文化庁長官官房国際課長 村田直樹



文化は、人間の知的な営みを基に長い年月をかけて創造されとともに、新しい社会を生み出す活力の源泉となるものと言われています。また、文化は国民あるいは民族共通の拠りどころとして重要な意義を持つとともに、その普遍的な価値によって、国際社会における理解と尊敬を得ることができると考えられます。

異なる文化が接触する国際文化交流は、新たな文化の創造や自国文化の再発見の機会として大きな意義を有しています。国際化の進展や情報技術の発達等に伴い、意識的であるか否かにかかわらず、多様な形で異なる文化が接触し、何らかの評価や価値判断が行われる機会が増加しています。こうした状況の下で、わが国文化の創造・継承を担う者に刺激を与えるとともに、国民が自国文化の価値を再認

識したり、異なる文化に対する理解を深めるものとして、国際文化交流を推進していくことが求められています。

文化庁は、中央省庁改革に当たって、国際文化交流において、より重要な役割を果たすことを求められ、本年一月に長官官房に国際課を設置して、国際文化交流に積極的に取り組むための体制を整備しました。国際文化交流を一過性のものに終わらせることなく、持続的・継続的に進めることが重要であり、このためには、人と組織の国際的なネットワークを形成・活用していくことが肝要です。幸い文化庁は、多くの芸術家、文化財専門家をはじめとする関係者、文化関係団体や美術館・博物館や劇場などの文化組織・施設と連携・協力をして文化行政を進めており、こうした結びつきを国際文

化交流に生かしていくことが可能です。既に、文化庁在外研修員として海外に派遣された芸術家等は約千五百人を数え、それぞれの人的ネットワークが構築されているわけですし、美術館・博物館どうしの交流も相当な数にのぼっています。文化財分野においては、二国間の共同研究や協力事業はもとより、ユネスコや関連の国際機関を通じて多国間のネットワークも形成されています。

しかし、人のネットワークが組織のネットワークにうまく結びついているかどうか、また、美術館・博物館が真に国際交流の拠点として活動できる基盤を構築できているかどうか、大使館等のネットワークを生かしているかどうか、といった点についてはまだまだ多くの課題があるように思われます。官民がそれぞれのネットワークを生かして国際文化交流を持続的・継続的に推進していくための基本的な方針や全体的な枠組みを明確にすることが肝要であり、今後、文化庁として国際課が中心に取り組んでいくべき重要課題であると認識しています。

◆事例紹介◆

イクロムを通じた文化財研究のネットワーク

東京文化財研究所保存科学部長
イクロム理事 三浦定俊



イクロム（ICROM）と略称される文化財保存修復研究国際センターは、一九五六年にインドのニューデリーで開催された、第九回ユネスコ総会で創設することが決まり、一九五九年にローマに



イクロムと東京文化財研究所の共催による和紙の研修

設立された。創設当時の加盟国はオーストリア、ベルギー、オランダ、スペインなど一七ヶ国であったが、その後、加盟国が増えて、現在では一〇〇ヶ国になっている。主要国ではイタリアが一九六〇年、フランスとドイツが一九六四年、日本とイギリスが一九六七年、アメリカ合衆国が一九七一年、カナダが一九七八年、中国が昨年、それぞれ加盟した。アジアではスリランカが一九五八年の創設当時から加盟国でもっとも古く、その後、カンボジア、インド、パキスタン、マレーシア、日本、タイ、韓国、ネパール、ベトナム、フィリピン、ミャンマー、中国の順で加盟して、現在一三カ国がイクロムの加盟国となっている。イクロムは質の良い保存を目指すこと

を作ったイタリアやスペインから五、六十年の任期で芸術監督を招いていました。そこで制作したものをヨーロッパの国立劇場で上演するというようなこともやっていた。これは演劇のEUみたいなもので、刺激的なネットワークです。英国で作ったネットワークは今の仕事に生かされていますか。

新国立劇場で海外作品の招待公演を積極的に行いますが、今回招待する太陽劇団と演出家のムヌーシユキンに出会ったのも留学中です。来年はベーターシユタインというドイツの演出家の作品を上演する予定ですが、彼と出会ったのも同時期です。「芸術家は個」という意識が強いだけに個人同士の刺激のし合いが重要で、私はあらゆるアンテナを張って彼らの新しい仕事を見てきました。新国立劇場ができたときから私は世界で一番優れた演出家を招きたいと考えていました。

ネットワークを維持あるいは拡大するための工夫というのはあるのですか。

例えばこの劇場に情報センターがありますが、ここに戯曲の図書館をつくって

いろいろな国の国立劇場と作品の交換をしたいと考えています。

栗山監督の個人のネットワークを新国立劇場という組織のネットワークに広げることや新国立劇場を国際文化交流の拠点とすることについてはどうお考えでしょうか。

国立の劇場ですから世界とのネットワークをちゃんと作っていないと行かないと思います。それがどういう形になるかは、今後太陽劇団やベーターシユタインや韓国との共同作業を経るうちに見えてくるかもしれません。また、文化庁の招聘プログラムなども利用して外国の演劇人と交流する機会をどんどん増やし、国際交流の拠点という点も推進していかなければと思います。

今後の展望や抱負をお聞かせ願えますか。

一つは、韓国、中国、インドネシア、フィリピンなどと共同で一つの作品を作って、それらの国を巡業公演するというようなアジアのネットワークを作りたいと思っています。韓国とはワールドカップ

が共催に合わせた共同企画が既に進行しています。

アジアのネットワークと同時に、新しいことにどんどん挑戦していくヨーロッパの実験的な演劇も日本に紹介したいと思っています。もちろんヨーロッパの演劇人あるいは劇場のネットワークにも参加できればいいとは思いますが、演劇は言葉が中心にあるためになかなか難しい面があります。それは音楽という共通言語が中心にあるオペラやバレエとはちがう難しさです。

例えば、今、日韓で作っているものは、日本語と韓国語のチャンポンです。字幕やイヤホンなしでもわかるような戯曲になっています。私がアジアにこだわるのの一つには二〇世紀の戦争と革命をどう語り継いでいくかをアジアの人たちと検証しなければいけないという思いがあるからです。

アジアとヨーロッパの二つの方向での発展をお祈りいたします。本日はありがとうございました。

にも、子供から大人まで、文化財の保存に対するあらゆる人々の意識を高めることを目的とする。その目的のために、イクロムでは五つの主要な活動をあげている。一番目は世界中で文化財の専門家を育てるための研修を行うことであり、二番目は文化財の情報を収集し、提供すること、三番目は保存や修復のための方法や技術、考え方を研究すること、四番目は外部の専門家や機関との協力、最後の五番目は広報である。

特に専門家の研修は、イクロムの設立当初からの主要な活動で、これまでに三九〇〇人を越える人々がイクロムで研修を受けた。そのこと自体が、イクロムの重要なネットワークを形成する役割を果たしている。例えばイクロムの理事会には、加盟国の中から現在、二四名の理事が選出されているが、その大半がイクロム研修の修了者または講師である。このことはイクロムで研修を終えた者がそれぞれの国に帰って、行政や研究機関の中で、文化財保存のための重要なポストに就いていることを示している。あるいは

◆事例紹介◆

奈良国立博物館における
国際交流

奈良国立博物館学芸課長 梶谷亮治



いささか古い話になるが、奈良国立博物館で一九七八年の春から夏にかけて催された「日本仏教美術の源流」が、画期的な出来事だったと思う。その展覧会はインド及び東アジアの仏教美術と我が国の作品とを比較展示したものであり、アジアはもちろん欧米のコレクションからも作品を借用している。国外では韓国、米国、英国、カナダ、ドイツの五か国一博物館から、あわせて三十数件の文化財を拝借している。韓国国立中央博物館の、著名な金銅菩薩半跏像も出品され、当時の倉田館長のご努力がしのばれる。展覧会のエピソードは博物館の先輩に語りつがれ、いまでも開催当時の興奮の様子が彷彿する。

「源流展」でクローリエとして来館された

米国・クリーヴランド美術館のカニンガムさんは、その後同美術館の日本・韓国美術部長を務めておられるが、以来当館との交流は長く続いている。当館では一九九八年に海外交換展を開催したが、二月にクリーヴランド美術館の所蔵品による「東洋絵画の精華」展を当館で、八月に当館の収蔵品による「Buddhist Treasures from Nara」を先方で開催した。クリーヴランド美術館での展覧会には私もクローリエとして出張し、展示に関わった。この展覧会ではカニンガム氏入魂のものであり、米国内の注目を集め、入館者も多かった。優れた作品の力を実感した。今後の両館の関係を考えるときに、本当に意義深い出来事であったと思う。当館の活動でもう一つ画期をあげると、

韓国の国立博物館と、中国・上海博物館との組織的な交流であろう。

一九九〇年から三か年の計画で「日韓両国に所在する韓国仏教美術の共同調査研究」という国際学術研究を行った。報告書を一九九三年三月に刊行している。

この企画は西川館長の時に立ち上がり、山本館長が引き継がれたもので、日韓で二七人の研究者が参加した。韓国側には韓炳三国立中央博物館館長(当時)、鄭良謨氏、姜友邦氏、朴永福氏など指導的な学者が参加している。双方の研究者が相手国に出張調査したので、その手続き、実際の同行調査など運営が大変な面もあったが、報告書を見れば当時の新鮮な気持ちがいまも感じられる。その後国立慶州博物館と学術交流の協定を結び(一九九九年、内田館長)、今年、鷲塚館長と朴永福館長との間で覚書を交換し、今後の組織間交流の具体案を確認した。

上海博物館の馬承源館長が文化庁の招聘で奈良博に来館されたのは、一九九二年のことであった。その機会に当館講堂で「中国金銅仏—三世紀から六世紀まで」



ボローニャ会議

の組織からの代表も理事として参加していて、日常的な協力関係をつくっている。ユネスコの世界遺産委員会では逆にイクロムが、世界遺産保存のための諮問機関として、ユネスコに協力する立場にある。外部の機関とのネットワークで見逃せないのは、イクロムには準会員(アソシエイトメンバー)の制度がある点である。イクロムは政府間組織(IGO)であるので、会員は国に限られるが、イクロムの趣旨に賛成し、協力しようとする機関や組織(非営利団体に限られる)は、イクロムの準会員になることができる。現在一〇一の組織が準会員になっていて、日本では東京と奈良の文化財研究所が準会員である。

研究者のネットワークに関し、最近、イクロムでは面白い話がある。現在イクロムでは大学に協力して、文化財保存科学者のための大学院コースを作ろうとしている。しかし文化財保存のための科学者は、保存科学者として専門の課程で教えられて育つものか、それとも物理や化学などの他分野で専門を学んだ上で文化

財に移って、初めて一人前になるものかという議論が昔からあって、どのようなカリキュラムにするのか、一度世界中からみんな保存科学者が集まって議論しようということになった。私も呼ばれて、一九九九年の一月末にイタリアのボローニャ大学で会議が行われた。

会議に参加した四〇名ほどの人々は、世界を代表する第一線の文化財保存科学者ばかりで、よくこれだけの人が一カ所に集まったと思わざるを得なかった。それはもちろんイクロムがこれまで培ってきた、人のネットワークによっていたこととはいうまでもない。そのかわり、かなり激しい議論があつて、最後の宣言を出すまでなかなかまとまらなかった。このボローニャの会議では、昔からのイクロムのネットワークが生かされたのではないかと思う。それはイクロム初代事務局長が「保存科学の父」といわれるイギリスのブレンダリー博士であったこと、また歴代の事務局長もそれぞれの分野でみな優れた学者であったことと、無関係ではない。今後も期待していきたい。

◆報告◆

二つの国際交流年

— 英国における「Japan2001」
日本におけるイタリア2001年 —

政府間で取り決められ実施される国際交流年事業は、計画的・総合的に国際文化交流を推進する機会・場として、また、諸外国との相互理解を促進する機会として、国際文化交流における重要行事となっている。本年度（二〇〇一年度）は、二〇件の国際交流年が取り決められているが、それらの中で規模が大きく、新聞紙上等でも紹介されている「英国における「Japan2001」と「日本におけるイタリア2001年」について、前者は日本国内実行委員会、後者は在京イタリア大使館への取材をもとに報告する。

1 英国における「Japan2001」

(1) 経緯

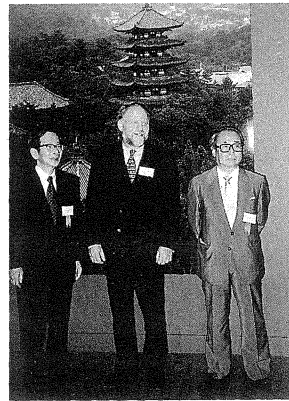
英国における「Japan2001」は、二〇〇

の演題でご講演いただき、その後原稿を当館紀要『鹿園雑集』創刊号に掲載させていただいた。馬館長の来館を契機にして、中国青銅器や金銅仏などについて貴重な専門的助言を得ることができ、また日中間の文化交流や博物館交流についても意見を交換することができた。これと前後して当時文化交流辦公室の代表格であった丁義忠氏（現東京国立博物館勤務）も来館され、その後の当館と上海博物館の学術交流の基本について大方の方針をたてた。翌年以降三人ずつ相互訪問を続け、現在に至っている。こうした交流を基礎として、二〇〇一年一月には、文化庁と共催して「日本文物精華展」を上海博物館で開催することができた。私たちがこのような大規模な海外展に関わることでできたのは幸甚なことであった。

ヨーロッパにおける日本美術品の調査も一九九二年から始まった。はじめは東京国立文化財研究所と共に調査を始めた。東文研は米国のコレクションの調査であり、私たちはヨーロッパ担当ということであった。前学芸課長の阪田さんがヨ



リンデン美術館における漆工芸の調査 2001年7月



一九九八年、米園クリヴランド美術館における海外交換展のオープニング
右から、驚塚東京国立博物館次長（当時）、バグマン・クリヴランド美術館館長、内田奈良国立博物館館長（当時）

ロッパに人脈があり、ギメ東洋美術館（一九九六年報告）、ケルン東洋美術館（一九九九年報告）、リンデン美術館（二〇〇二年報告予定）と調査を続けている。当館の若い学芸員は欧米にも知己を得て、きつと将来につなげてくれるだろうと期待している。

さて、ごく最近の出来事の一つ。当館の驚塚館長、韓国国立慶州博物館の朴永福館長、米園ジャパソサエティ・ギャラリーのモンロー館長が奈良で小さい会合を開いた。仕掛けたのはモンロー氏で、朴氏はわざわざ韓国からこのために来日された。国際交流も今、二国間関係からさらに広い世界へと広がる可能性を感じた。将来この会合は新しい形の展覧会として実を結ぶことと思われる。

博物館の国際交流は急速に展開しつつある。しかし肝要なのは個人の信頼関係を基礎とした組織としての確実な交流であろう。当館でも先輩方の築かれた礎の上にあらたな仕事を加えることができれば幸いであると思う。

文化庁長官官房国際課

一年五月から二〇〇二年三月にかけて英国全土で実施される大型の日本文化紹介行事である。一九九五年二月の日英外相会談で提案され、その後、九九年九月の日英外相会談の際に公表された。日英間の国際交流年としては、一九八一年の「大江戸展」、一九九一年の「ジャパン・フェスティバル1991」、一九九八年の日本における英国年「英国祭UK98」に続くものとなっている。

英国における「Japan2001」全体の運営のため、日英双方に国内実行委員会を組織している。日本側は、熊谷直彦・三井物産株式会社相談役（経団連顧問）が実行委員長を務め、三井物産と外務省が事務局となっている。英国側は、フレクナム卿が実行委員長となり、非営利団体とし

て「Japan2001」事務所を組織し、在英日本大使館広報・文化センターとともに事務局となっている。

(2) 事業の構成と内容

主要な事業として、美術展示一七展、舞台芸術七公演、音楽一〇公演、映画・写真展六展、生活文化展一一展といった大型の文化事業のほか、科学シンポジウム等の知的交流、教育交流、草の根交流など、総計八三五（二〇〇一年八月現在）の催しを実施する。

開幕の催しとして、五月一九日と二〇日にロンドンのハイドパークで、流鏑馬や太鼓演奏、阿波踊り、御輿などの各種行事のほか、屋台などの出し物による「祭り公園の中の日本」を実施した。他に、九月五日から一二月二日まで大英博物館で、縄文時代の信仰遺物から室町時代の神道信仰に関わる国宝を含む絵画、彫刻、工芸品を展示する「古代日本の聖なる美術展」（文化庁、国際交流基金、大英博物館共催）を開催中である。また、五月三〇日から六月一六日までロンドン及びマ



イタリア・ルネサンス—宮廷と都市の文化展
写真提供：日本経済新聞社

それぞれの事業・催しに一貫する共通テーマとして掲げている。例えば、フィレンツェの美術文化財監督局が企画に携わった「イタリア・ルネサンス—宮廷と都市の文化展」では、年代とともに、当時、作家が住んだ都市ごとに作品の傾向が異なることを理解してもら

方への展開」を促進するきめ細かい対応を行っている。

(2) 日本におけるイタリア2001年

一方、日本におけるイタリア2001年では、政府及びイタリアの主要企業の主導に基づいて、トップ・ダウンで芸術から生活デザインまで総合的に「本物の」イタリア文化を日本に紹介することを基本的な考え方としている。

また、近年、イタリアへの日本人観光

客が増えるなど、日本人のイタリア及びイタリア文化に対する興味が高まっているとの認識のもと、日本人により深くイタリア文化を理解してもらうことを目的として、①各都市の地方分権の伝統に基づく都市ごとの個性豊かな文化の集大成としてのイタリア文化（イタリア文化の豊かさは地方文化の豊かさであること）、②芸術と科学技術の融合や機能性とデザインの融合など、総合的なものに価値をおくイタリアの国民性と美意識を、それ

ぞれの事業・催しに一貫する共通テーマとして掲げている。例えば、フィレンツェの美術文化財監督局が企画に携わった「イタリア・ルネサンス—宮廷と都市の文化展」では、年代とともに、当時、作家が住んだ都市ごとに作品の傾向が異なることを理解してもら

（文責：国際課国際文化交流調整官 中島健次）

ンチエスターで、人間国宝中村鴈治郎氏が率いる松竹大歌舞伎近松座による「曾根崎心中」の公演及び「歌舞伎和紙人形展」を実施した。

2 日本における

イタリア2001年

(1) 経緯

日本におけるイタリア2001年は、二〇〇一年三月から二〇〇二年七月まで、日本各地でイタリアの文化、伝統、生活を総合的に紹介する行事である。一九九五～一九九六年に実施された「イタリアにおける日本年」の返礼として、二〇〇一年を「日本におけるイタリア2001年」とすることを両国政府間で合意し、その後、二〇〇〇年五月に首脳会談において、当該行事の実施が確認された。

日本におけるイタリア2001年の企画、実施、資金調達のため、イタリアは国会決議に基づき、外務省、文化財・文化活動省などの関係省庁及びイタリアの主要民間企業からなる「日本におけるイタリア2001年財団」を設置している。日本側

では側面的支援を行うため、日伊協会が中心になり、日本側推進委員会を組織している。

(2) 事業の構成と内容

主要事業として、美術展示一六展、オペラ・コンサート二四公演、映画・演劇・バレエ八公演のほか、科学・テクノロジーとデザインに関する一〇展示、イタリアの各都市と独自の伝統の紹介に関する九行事など、計八二の催しを実施する。

「日本におけるイタリア2001年」のオープニングを飾り、三月二〇日から七月二〇日まで国立西洋美術館で開催された「イタリア・ルネサンス—宮廷と都市の文化展」、二〇〇一年八月から二〇〇二年七月まで東京を初め、全国五か所で開催される「世界遺産ポンペイ展—古代ローマの輝き」、二〇〇一年五月から二〇〇二年五月まで、仮面舞踏会など六作品を上演する「新国立劇場イタリア・オペラ展」、二〇〇一年一月から二〇〇二年三月まで東京近代美術館フィルムセンターで約五〇作品を上映する「イタリア映画の大

回顧展」などが実施される。

3 国際交流年の企画・実施

(1) 英国における「Japan2001」

国際交流年は、一般的にその事業構成として、その国の文化の精髓を紹介する事業と当該国の生活文化、生活様式などを紹介する参加・体験型交流、草の根交流からなる。

英国における「Japan2001」では、日本文化の精髓を紹介することと同時に、ボトム・アップによる「参加・体験型交流」と「地方への展開」をより重要な柱としており、そのため、ほとんどの事業・催しを民間・草の根主導で実施している。両国の国内実行委員会は、日英の企業・団体の資金協力を得て、双方の実行委員会の合意のもと、申請に基づいて各々の認定事業・催しに一〇〇万円程度を上限とする助成を行い、民間及び草の根の主導を支援する役割を担っている。また、英国全土を九つの地区に分けて、各地区ごとの事業紹介パンフレットを作成・配布するなど、「参加・体験型交流」と「地

うべく、作品を選定し、会場での作品の配置を考えたとのことである。

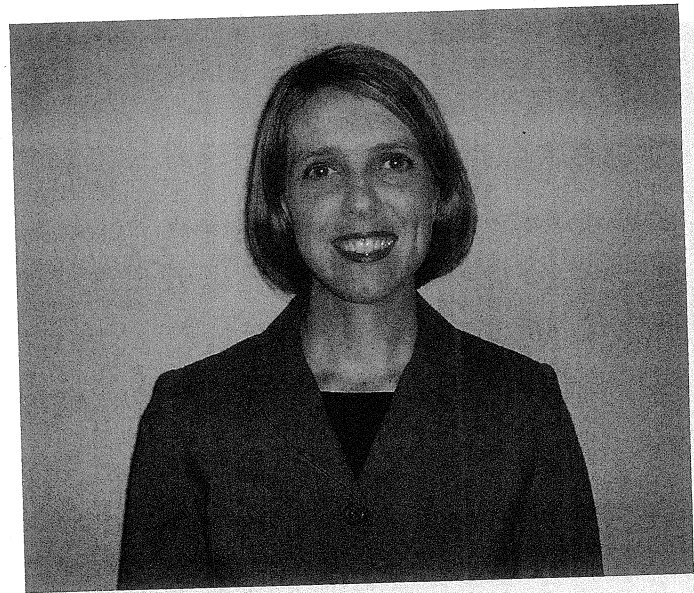
さらに、今回の国際交流年における両国の文化芸術に携わる人々の協力を単発のイベントのみで終わらせることなく、特に成功したいいくつかの事業については、持続的・継続的な交流へと発展させることを視野に入れているとのことである。

このように、ここに紹介した二つの国際交流年は、事業の企画・実施においてボトム・アップとトップ・ダウンの対照的な方法をとるが、双方とも自国文化の何をどのように相手国に伝えるか明確な意図と目的意識をもつて、国際交流年全体を企画・構成した上で、各事業を実施している。これが、個々の公演・展示等の魅力と相まって、これらの国際交流年に対する一般の人々の高い評判とマスコミ等における評価につながっていると考える。

在日豪州大使館文化担当官
キャサリン・フニョー氏に聞く

インタビュー／文化庁国際課国際文化交流室長 町田大輔

文化アタッシェのネットワーク



キャサリン・フニョーさんは在日豪州大使館の文化担当官。高校の時から日本語を学び、大学では日本文学を専攻。日本の思想・映画・演劇・歴史なども学んだ。1995年4月から1996年3月まで関西学院大学に留学。

今回フニョーさんをインタビューすることになったのは、日本留学時からの人的ネットワークを現在の大使館文化担当官としての仕事にどう生かしているかという点に興味を持ったからです。今日はその辺を意識してお話したい。ただれば幸いです。

私が日豪文化交流の仕事をするようになったのは、日本留学から帰国後シドニーのシャーマン・ギャラリーでボランティアを始めてからのことです。当時私はまだシドニー大学大学院の修士課程に在学中でしたが、大学院修了後も一年間勤めたこのギャラリーは、アジアとの交流を重視しており、日本で豪州の芸術を紹介するために私も日本に行きました。この時に在日大使館の文化担当の人たちと一緒に仕事をしているうちに、大使館で働いてみないかと言われました。当時の私は一年間の留学だけでは満足できず、また日本に住みたいと思っていたので、二つ返事で引き受けました。

こうしてギャラリーの仕事をしようと思ったのでしようか。

日本の映画、美術、文学を勉強したので、日豪の文化交流に関係する仕事でできればと思っていたところへ、ある日シャーマン・ギャラリーの館長の話を聞いて日本と交流していることがわかり、興味を持ちました。

ギャラリーで日豪交流の仕事をしていた時にはどんな人たちと出会いましたか。

日本のギャラリー、日本政府（文化庁、国際交流基金）、美術館、美術館協会、芸術助成団体、企業関係者、芸術家といったところです。大使館に移ってからも似たような仕事をしていますので、彼らとは今でも付き合いがあります。

現在の仕事はギャラリーの仕事とどう違いますか。

仕事の対象とするものの幅がずっと広くなりました。以前はビジュアル・アートのみでしたが、今は文化なら何でもやります。ビジュアル・アートのほかに音楽、演劇、ダンス、……スポーツもやっています。でも、日本と豪州の間に立つて、交流がスムーズに行くように、そし

てお互いの理解が深まるように働くという基本的な考え方は同じです。とてもやりがいのある仕事です。重点は日本人に豪州の文化を紹介することにあります。日本に関心を持つ豪州人をサポートすることや共同制作も重要です。

具体的にどのような仕事をしているのかおしえてください。

一つは大使館独自の事業で、ウェブ・ニュースを流したり、豪州の招聘プログラムに日本のプロデューサーや学芸員を招いたりすることです。もう一つはすでにある企画を支援することです。例えば、『クリストファー・トロッター*作品展』を後援し、ウェブ・ニュースで宣伝しましたし、『呼吸する部屋*パトリシア・ピッチニーニ*展』ではオーブニング・レセプションの会場を大使館が提供しました。豪州映画『もういちど』の封切り前にポール・コックス監督が来日した時は、記者会見を開いてプレス・リリースしたり、大使館のネットワークを使って宣伝したりしました。豪州の文化関係者が来日した時に、目的に応じた適切な行き先

オーストラリア大使館 文化部
Film Music Theatre Visual Arts Literature New Media

オーストラリア関係のアート情報商戦
アート・イベント情報
AUSTRALIAN EMBASSY-ARTS-EVENTS-INFO

web e-newsletter information

■オーストラリア大使館文化部が毎月お届けする、アートイベント情報。webとe-mailが連動した、新しいタイプの情報提供サービスです！

www.australia.or.jp/culture/events

フニョー氏が作成を担当している在日オーストラリア大使館文化部のウェブ・ニュース

(注)*クリストファー・トロッターは豪州の彫刻家。
**パトリシア・ピッチニーニは写真、コンピュータ・グラフィックス、彫刻、インスタレーションなど多岐にわたる創作を行う豪州の現代芸術家。

を教えることも重要な役割です。

異なる文化の間の橋渡しをする上で難しいと思うのはどんなところですか。

誤解を解くことでしょうか。例えば、豪州では同一州内では自分が契約した一つのギャラリーでしか自分の作品を展示できないことになっています。したがって、豪州の芸術家は日本のどこかのギャ

ラリーで展示すると、その後もずっとそこで展示できると誤解する傾向にあります。このような時に私は日本では違うのですよと説明します。

実は日本で展示したいという豪州の芸術家はたくさんいて、その人たちのすべての問題に私が答えることはできません。そこで豪州にいながら日本のアート・シーン进行研究できるように、シドニー大学時代の同級生と協力して情報をニュースレターにして豪州の芸術界に送っています。文化庁のメディア芸術祭や国際文化セミナーもこのニューズレターで紹介させていただきました。

相手も自分も忙しい中で、出会った人たちとのつながりを継続していくためにどんなことを心掛けていますか。

一つはウェブ・ニュースを今までに会った人に送ること、二つめは会った人をイベントに招待し、また招待されたイベントに行くことです。三つめは会った人の話をよく聞いて、その人が何に関心を持っているかを覚えることです。関心事を覚えておけば、問い合わせが来た時に

その人を紹介したり、大使館のイベントで再会したときに同じ関心を持った人どうしを引き合わせたりすることが出来ます。大使館にはいろいろな情報が集まるので、それを自分だけでとっておかないで他の人とシェアすることが重要です。

人的ネットワークが役に立った例を聞かせてください。

シドニー大学に母の古い友人で松井朔子さんという先生がいます。その松井先生の紹介で会った佐和田敬司さんはシドニー大学に留学し、今は早稲田大学で教えている豪州演劇の専門家です。このような例はたくさんありますが、最近、ウェスリー・イノクというアボリジニーの演出家を日本に招いて講演ツアーをすることになりました。大使館以外の講演場所が見つからなくて、佐和田さんに相談したところ、彼がちょうどイノク氏の演劇を翻訳していたことがわかり、早稲田大学で引き受けてくださいました。彼のおかげで他の大学での講演も見込みが付き、日本演出家協会での国際交流セミナーも開催できることになりました。

そもそもイノク氏は、劇団解体社のプロジェクトを通して知り合ったメルボルン大学のピーター・エツカサル氏に先住民の演出家を日本に招待する計画を相談した時に彼が紹介してくれたのです。ネットワークはこのように複雑に絡み合っていて、自分でもきつかけがどこだったのかわからなくなることがよくあります。

最後に、国際文化交流に関して文化庁への要望・期待などありましたらお願いします。

日本と豪州の芸術家の交流や共同制作により積極的なご支援をいただきたいと思っています。交流や共同制作は両国の芸術家がお互いの文化への理解を深め、さらには作品制作のインスピレーションを得る良い機会ではないでしょうか。そして、それが日本の芸術の水準を高め、文化の多様化を図ることに少しでも貢献できればと願っております。

——今日は大変興味深いお話をありがとうございました。

◆特集◆

文化の香りに満ちた
新世紀日本の建設に向けて

【巻頭言】

文化の香りに満ちた
新世紀日本の建設

文化庁次長

【解説】

平成一四年度概算要求について

政策課

文化芸術創造プラン

(新世紀アートプラン)について

芸術文化課

文化発信について

国際課

社会全体による文化芸術の支援

政策課

なぜ今、芸術文化の振興なのか

山崎正和

求められる文化発信

青木保

●文化人と語る②
澄川喜一(彫刻家)

●Cross Road
内田めぐり(日本画家)

●江戸の万華鏡③
水谷修

●まろく活きのミニシアター⑧
美術館・博物館と学校の連携を考える・廣瀬隆人

●キワート・事典・アート・マネジメント⑤
小林真理

●文化財保存修理の社会学・2
金出ミチル

●日本の伝統美と技を守る人々
―選定保存技術保持者編⑧

村田九郎兵衛(蒔絵筆製作)

東浅太郎(研炭製造)

●文化の現場から⑩

伝統文化課調査官・佐々木正直

編集後記

文化庁に国際課が設置されてから九か月が過ぎました。この間、中央省庁改革に当たって文化庁に求められた「国際文化交流においてより重要な役割を果たす」という大きな任務をいかに果たしていくのか暗中模索の日々を重ねて来ました。

今回 原稿執筆依頼やインタビュー

ューを通して、様々な立場で国際文化交流を担っておられる方々に接し、交流の在り方に関して貴重な示唆を賜うとともに、交流に取り組むひたむきな姿を垣間見ることができました。これらの方々の情熱に文化庁はどのように応えていくのか、国際課の責務の重大さを再認識した次第です。

(M)

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページの意見欄や文化庁のウェブマスター宛へお寄せください。

ホームページアドレス
http://www.bunka.go.jp/
ウェブマスターメールアドレス
webmaster@bunka.go.jp

文化庁月報 10月号

(通巻397号)

平成13年10月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

URL: http://www.gyousei.co.jp

印刷所—(株)行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

（株）ぎょうせい営業部広告課

電話03(5349)6657 (ダイヤルイン)

©2001 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。